

補文標識の移動とその言語差異

宗正, 佳啓
福岡工業大学

<https://doi.org/10.15017/9209>

出版情報 : 九州大学言語学論集. 28, pp.69-91, 2007-07-31. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン :
権利関係 :

補文標識の移動とその言語差異

宗正佳啓
(福岡工業大学)
munemasa@fit.ac.jp

キーワード: 補文標識、ゼロ that、T-to-C movement、制約、階層差

1. 序

補文標識の分布に関する分析は従来から様々提案されており、ECPに基づくもの (Stowell(1981)等)、ゼロ that を接辞(affix)と捉えるもの (Pesetsky (1995), Bošković & Lasnik (2003) 等)、ゼロ that を含む節を縮小節(reduced clause)と捉えるもの (Bošković (1997), Doherty (1997), Grimshaw (1997)等)がある。しかし、これらの分析は特定言語内の that の生起可能な環境とそうでない環境のみの説明に留まり、その通言語的特性を網羅するまでには至っていない。また、ゼロ that の導入は初期近代英語の産物であり、それまでは補文は義務的に that が生じるが、こうした通時的言語差異についても議論されてはいない。本論文は、最適性理論の観点から幾つかの制約を提案し、その制約の相互作用と階層差により補文標識の生起とその言語差異、さらにその通時的変遷に統一的説明を与えることを目的とするものである。

2. 従来分析

Stowell (1981)は補文のゼロ that を空範疇の一種と見做し、ゼロ that が生起する環境と生起不可能な環境を空範疇一般に関する原理である ECP (Empty Category Principle)によって説明している。この ECP は空範疇を認可するためにそれが適正統率されることを求める原理であり、適正統率は次のように定められている。

- (1) 次の場合 α は β を適正統率する。
 - (i) α が β を統率し、
 - (ii) α が語彙範疇(V, N, A, P)であり、
 - (iii) α が β と同一指標関係にある。

Stowell (1981)は上記の適正統率に関して、ある最大投射が適正統率さ

れているならば、その主要部も適正統率されると見做している。また、上記(1iii)の同一指標関係は、例えば α が β に θ 役割を付与する場合などが含まれる。

では(1)の適正統率の定義に基づいて、ゼロ that が許されない環境について考えてみよう。こうした環境としては幾つかあるが、典型的な位置としては主語の位置、話題化された位置、発話様態動詞の補部等が挙げられる。

- (2) a. *[e The teacher was lying] was hardly obvious.
b. *[e The teacher was lying] Ben already knew.
c. *Bill muttered [e Denny was playing too much poker].

(Stowell (1981: 396-398))

(2a)の主語の位置は、語彙範疇ではなく機能範疇によって統率されており、(1ii)を満たしていない。(2b)の話題化された位置は統率されない位置であるため、(1i)を満たしていない。また、(2c)の発話様態動詞は補文に θ 役割を付与しないと考えられているため、(1iii)を満たしていない。(2)の補文に含まれるゼロ that は、どれも適正統率されていないため、ECP に抵触し非文法的と判断される。

Stowell (1981)はゼロ that を空範疇と見做しているが、それを別のものと捉えて、ゼロ that の生起に関する環境を説明したものに Pesetsky (1995)や Bošković & Lasnik (2003)等がある。彼らは補文のゼロ that を接辞(affix)と見做している。ゼロ that は接辞であるため、その性質上何らかの語幹に編入されることになる。こうした編入操作は主要部移動の一種であるので、主要部移動制約 (Head Movement Constraint) に従い、c 統御する至近の主要部への移動が要求される。例えば、ゼロ that を含む補文が動詞の補部にあれば、その動詞の語幹に編入されることになる。(3)のようにゼロ that を含む補文が動詞の補部にある場合には、主文動詞への移動が c 統御する至近の主要部への移動であるため、主要部移動制約を満たし問題はないが、上記(2a,b)のように主語の位置や話題化の位置にある場合は、c 統御していない主文動詞への移動となるため、主要部移動制約或いは適正束縛条件(Proper Binding Condition)に抵触し、非文法的と判断されることになる。¹

¹ Bošković & Lasnik (2003)は正確にはゼロ that を PF affix と捉え、それ故それは PF Merger によって語幹に編入されることになるが、そのためには両者が PF レベルで隣接していることが要求されると分析している。

(3) ...V [CP e [IP DP [VP V]]]

上記のようにゼロ that を空範疇又は接辞として捉える場合、それを
含む節は CP まで投射して形成されていることになるが、こうした分
析対して that がない節を別の範疇と捉える分析もある。Bošković
(1997)、Doherty (1997)、Grimshaw (1997)等は同一の語彙範疇の集合に
基づく複数の表示がある場合、より少数の投射を含む節が選択される
という経済性の条件に基づき、ゼロ that を含む節は CP までの投射で
はなく IP(TP)までの投射、つまり縮小節(reduced clause)であると主張
している。Doherty (1997)や Bošković (1997)は、ゼロ that を含む節が IP
までの投射である根拠として、補文での話題化による IP への付加が不
可能である点を挙げている。

(4) a. John believes [IP Peter likes Mary]

b. *John believes [IP Mary [IP Peter likes]]

c. John believes [CP that [IP Mary [IP Peter likes]]]

主節動詞が命題を s 選択する場合、その補文の具現構造は CP 又は IP
となるが、補文が that を含まなければ経済性の条件により、(4)のよう
に IP が投射範疇として選択される。選択された IP は主節動詞の項に
なるため、仮にその IP へ付加操作を行うとすれば、項への付加操作を
禁じる一般的条件によって阻止されることになる(Chomsky (1986)参
照)。(4b)では話題化された要素が項である IP に付加しているため非
文となる。しかし、(4b)で that が補文に導入された場合、投射範疇は
(4c) のように CP となり、IP は主節動詞ではなく C によって選択され
るので、話題化された要素を IP に付加することは可能になる。

以上、that 及びゼロ that の生起に関する従来の幾つかの分析を概観
してきた。これらの分析は、ゼロ that が起こり得る環境と起こり得な
い環境、またゼロ that を含む補文の文法範疇に関する説明は可能であ
る。しかし、言語の中には補文に補文標識の that に相当するものが義
務的に導入される言語があり、従来の分析はこうした通言語的特性に
対して統一的説明を与えるまでには至っていない。次節では、この補
文標識の通言語的特性を、英語以外の言語と比較検討しつつ考察して
行くことにする。

3 . T-to-C 移動

補文の that とゼロ that の選択は環境によっては随意的であり、通常
that が生起する場合 CP の主要部に基底生成すると考えられている。

しかし、通言語的な分析を行うと、that は基底生成するのではなく、移動によって CP の主要部に生起していることが結果として導き出される。例えば、Quebec French やイタリア語の方言 Romagnolo dialect、そしてアイルランド語では、that に相当するものが T-to-C movement により、CP の主要部に生起する。

(5) a. Quoi que tu as fait? (Quebec French)

what that you have done

‘What have you done?’

b. Chi che t'è vest? (Italian Romagnolo dialect)

who that you have seen

‘Who have you seen?’

(Haegeman (1991:111))

c. Cén bhean a phósfadh sé? (Irish)

Which woman that would-marry he

‘Which woman would he marry?’

(Radford (1988:501))

また、英語の一方言である Belfast English では、(6)のように埋め込み疑問文にも主語・助動詞倒置が観察され、CP の主要部に助動詞の代わりに that が生じることがある。

(6) Belfast English

a. I wondered where were they going.

b. I wonder which dish that they picked.

(Henry (1995))

この場合、助動詞と that の選択は随意的である。主語・助動詞倒置は移動を伴いコストがかかるので、経済性の観点からすれば常に that が基底生成することになるが、実際助動詞も生起可能である。従って、that は主語・助動詞倒置と同じく、T-to-C movement によって CP の主要部に生起していると考えられることができる。

言語の中には、英語の that に相当する補文標識が IP(TP)の主要部にある要素とアマalgamを形成する言語がある。例えば、アイルランド語の平叙文補文標識 go やヘブライ語の平叙文補文標識 še は、IP の主要部にある要素とアマalgamを形成することがあるという(アイルランド語については McCloskey (1996)、ヘブライ語については Shlonsky (1988)参照)。こうした事実は当該の補文標識が T-to-C movement によって CP の主要部に移動せず、IP の主要部に残留していることを示唆

している。従って、平叙文においても補文標識の *that* は上記のように、T-to-C movement によって CP の主要部に生じると仮定する。²

ゼロ *that* が生起する場合、Bošković (1997)、Doherty (1997)、Grimshaw (1997)等が分析するように経済性の条件に基づけば、補文の投射範疇は IP になるが、ここでは補文は Chomsky (2001a, 2001b)に従い phase である CP まで投射し、*that* が生起する場合は T-to-C movement によって CP の主要部に移動し、ゼロ *that* の場合はその移動がないと考える。では、そうした移動を駆動するものは何かという疑問が生じるが、ここではその移動を駆動するものとして HEAD という制約を仮定する(cf. Pesetsky and Torrego (2001, 2004))。

(7) HEAD: 投射範疇の主要部は空であってはならない。

この制約は投射範疇の主要部に顕在的な要素を要求する制約であり(cf. Grimshaw (1997))、もし CP の主要部が空の状態であればこの制約に違反するため、*that* が T-to-C movement によって移動すると考える。但し移動は自由に行えることはなく、Chomsky が提案した Last Resort Condition 等の経済性の原理が課されることになるが、ここではこうした移動の経済性を要求する制約の一つとして、*MOVE という制約を設ける。

(8) *MOVE: 移動は容認されない。

上記の二つの制約は最適性理論に基づく制約と考えるが、ここでその最適性理論(Prince and Smolensky (1993))の基本的な考え方を概観しておく。この理論は生成文法理論と同じく、文法を普遍的な部分と個別言語の特徴の二つの部分に分けて考える点では同じであるが、従来

² 査読者が指摘するように、T に補文標識の *that* が生起し、その後 T-to-C movement によって CP の主要部に移動しない場合、(i)に示すようにそのまま T に残留することになり問題となる。

(i) *I think they that know the secret.

しかし、こうした例は後で述べる完全解釈の制約に抵触するため排除されると考えられる。つまり、*that* が T に残留すると、英語の場合それから右が補文であると解釈され、LF で適切な解釈が履行されないことになる。アイルランド語やヘブライ語において、補文標識の *that* に相当するものが T に生起することは先程述べた通りであるが、詳しくは McCloskey (1996)、Shlonsky (1988)の議論に譲るが、これは補文標識の *that* に相当するものが T に残留しても、LF で適切な解釈が可能であるためである。

の生成文法理論が採る実際に観察される表層形は抽象的な深層構造から規則または原理の規定を受けて生成されるという考え方とは異なり、特定の表層構造が実現するのは、規則または原理の体系がその構造を派生するからではなく、適格性を規定する制約によってその構造が最適なものとして選出されると考える。文法の普遍的な部分は Constraints (Con)、Generator (Gen)、Evaluation (Eval)の3つの機能に分解される。これら3つのうち Con はすべての個別文法の元となる制約群であり、すべての言語に共通しており、個別言語の文法はこれらの制約群が特定の階層を成すことによって作り出されると考えられている。こうした制約は違反可能であり、制約違反があっても他の構造と比べて制約を最大限に満たすものが文法的な構造として選択されると考えられている。また、言語間の差または方言差は、従来の理論では規則の有無や順序づけ、又は普遍的な原理と媒介変数の値の違いによって説明されてきたわけであるが、最適性理論では言語間の差は制約の階層差に還元されると考える。Gen はそれぞれの基底形、つまり入力に対して論理的に可能なすべての出力候補を作り出す機能を持ち、Eval は Gen によって作り出された複数の出力候補に対して、言語ごとに階層化された Con に照らし合わせて、それらの中から制約を最大限に満たす構造を選出するといった機能を持っている。

上記(7)、(8)の二つの制約は、最適性理論に従って特定の階層に位置づけられるが、その階層差と他の制約との相互作用で異なる文法現象が説明されることになる。ここで問題としている that の移動は様々な移動現象のうちの一つであるが、比較のため、先ず、他の移動現象である wh 移動を考えてみよう。この wh 移動は、一つには Rizzi (1996) の Wh-criterion 等の原理の要請によって駆動されているものと考えられる。言語の中にはルーマニア語やブルガリア語のように、すべての wh 句が顕在的に CP に移動する言語があるが、その一方で日本語や中国語等の言語では wh 句の顕在的な移動はない。最適性理論では言語差異は制約の階層差に還元されるため、日本語や中国語では *MOVE が Wh-criterion よりも上位にランクされ、そのため wh 句が元の位置に留まるものと考えられる。

これと同じことが that の移動にも当てはまる。つまり、*MOVE が HEAD よりも上位にランクされていれば、that の移動はなく CP の主要部にゼロ that が生じ (colloquial Haitian, Kabiye, Pirahã, Kobon 等)、一方 HEAD が *MOVE よりも上にランクされていれば、次の表のよう

に常に that が生じることになる。

(9)

Candidates	HEAD	*MOVE
☞ ...V [CP that _i -C [IP DP t _i [VP V]]]		*
...V [CP e [IP DP [VP V]]]	*!	

実際アイスランド語、イディシュ語、ポルトガル語、フリジア語、ハンガリー語、ルーマニア語のように常に補文に that に相当する補文標識が生起する言語があるが、この事実は制約が HEAD >> *MOVE となっていることの帰結として説明される。³

英語では常に補文に that が生起することはなく、ある条件下ではゼロ that が生起する。ここでの分析では、ゼロ that が生起する場合、that の移動がないため、上記の制約が *MOVE >> HEAD と序列化されていると考えられる。しかし、この階層では英語では事実と反して、補文に that が全く生起しないことを予測してしまう。そこで that の生起には他の何らかの制約が関わっており、その制約と上記 *MOVE、HEAD の二つの制約の相互作用によって that が導入されると考えてみる。

ゼロ that が許されない環境に関しては(10a)のような主語の位置、

³ 補文標識の that が T-to-C movement によって CP の主要部に生起するのであれば、査読者が指摘するように、(i)のような文が生成することが予測される。

(i) *That they know the secret.

しかし、言語の中には主節の文頭に補文標識が生起し、その文のタイプを明示する言語があり、当該の文が平叙文であれば that に相当する補文標識が導入される場合がある。スペイン語がそうした言語として挙げることができる。

(ii) Que mi gato se enratonó. (Spanish)

That my cat itself enmoused

‘My cat got sick from eating too many mice.’

(Radford (1988: 298))

英語ではこうした例は非文として排除されるが、これは英語が表示の経済性に関わる制約を遵守しているためであると考えられる(表示の経済性に関わる制約については詳しくは Munemasa (2003)参照)。つまり、この表示の経済性に関わる制約が HEAD よりも上にランクされており、that を導入せずともそれが平叙文であると分かるため、導入する必要はないということである。一方、スペイン語のような言語では、表示の経済性に関わる制約が HEAD よりも下にランクされており、従って、主節の平叙文でも that に相当する補文標識が導入されるのであろう。

(10b)のように副詞類の所属が主節か従属節かに関して曖昧さが生じる場合、(10c)のように話題化によって that 節が前置されている場合、(10d)のように主節と that 節との間に長い語句が介在している場合等が挙げられる。

- (10) a. *(That) John married Mary surprised me.
- b. We maintain *(that) in London a nice flat is hard to find.
- c. *(That) John married Mary already knew.
- d. He believes, as is often the case, *(that) John is his best friend.

(10)の例に関しては、すべて節境界を明示し文処理の上で曖昧さを回避する必要のある文である。つまり当該の節に that がないと、その節が補文であることが明示されず、LF で適切な解釈を受けることが不可能になるため、その文が非文法的になると考えられる。

ゼロ that が許されない環境としては他に特定種の動詞補文がある。ゼロ that は一部の動詞補文でのみ認められ、factive verb, response-stance verb, 或いは subjunctive mood を示す動詞補文において、ゼロ that は認められないという主張がある(cf. Melvold(1991)等)。しかし、分類によって補文における that の分布を説明することが一概に正しいとは言えず、実際 ACE、BNC、LOB 等様々なコーパスを分析すると、こうした動詞補文においてもゼロ that を含む文が散見される。また、否定形が伴った動詞補文は that の省略が認められないとされるが、(11d)のように省略された例が散見される。

- (11) a. subjunctive mood

I'm proud of the whole lot of you. I suggest we all have a good shower and hit the bunk. (LOB)

- b. factive verb

We regret we cannot accept special requests on late offer holidays. (BNC)

- c. response-stance verb

Pace Gerald Stone, this does not place him "firmly in the Black Sea area" though I will admit Odessa lies to the south of Kiev and is both a Ukranian city and on the Black Sea. (ACE)

- d. negation

Unsurprisingly, the Divisional Court did not think this was enough. (BNC)

このように反例が存在するため、特定の動詞補文の種類と that の分

布を直接結び付けることは有効ではない。また、前節で見た that の分布に関する従来分析 (Stowell (1981)、Pesetsky (1995)、Grimshaw (1997)、Doherty (1997)、Bošković & Lasnik (2003)等) もこうした that の随意性をうまく捉えることはできない。むしろ that の生起に関する随意性は、統語的なアプローチよりは寧ろ意味的アプローチを採る方がより良い説明が可能であるように思える。

Bolinger (1972, 1979)は、that を含む節はそれが省略された節とは意味が異なると主張しており、that は指示詞と同じく一種の照応表現であり、問題となっている節が前後関係のない事実を叙述しているのではなく、that が遡って指示しうるような既出事項を叙述しているような時には、that を用いるのが適切であると分析している。例えば、話者が質問をしているのでもなければ、答えを含意しているのでもなく、自然に新情報を提供しようとしている状況では、次の(12a)のように言うことはできるが、(12b)のように that が補文に含まれると奇妙であるという。

(12) a. The forecast says it's going to rain.

b. *The forecast says that it's going to rain.

Bresnan (1972)も Bolinger と同じく、that には定性、所謂、definiteness の意味があることを主張している。もしこうした分析が正しく、補文標識の that は、指示詞の that と同じく照応表現としての性質を持っているのであれば、補文標識の that は前提となる命題と結びつき、that が連動して補文に具現化することで、それが補文の命題が前提となっていることのマーカーとして機能すると言うことができる(cf. Lasnik and Saito (1986, 1992))。

これに関連して、Bolinger (1972)は know 等の動詞の補文を例にとり、その補文に that がある場合は、それが意味的に real or implied information question と繋がり、that がある場合とない場合では意味が異なると主張している。例えば、夫と妻の会話で、夫が妻に Do you love me? と聞かれて、You know that I do.と答えた場合その返答は議論がましく聞こえ(argumentative)、一方、You know I do.と答えた場合、事実を断言しているように解釈されるという。

こうした補文の内容と that の分布を結びつける分析には、他に Erteschik (1973)がある。Erteschik は補文の that の省略は、基本的に意味的に優勢(dominant)な補文において可能であることを示唆している。この意味的優勢という概念は、文の内容が前提になっておらず、

また先行文脈で言及されていることもなく、文中の他の部分よりも際立っていることを表している。例えば、発話様態動詞の補文には that の省略が不可能であるが、これはその動詞を含む主節が発話様態を表すことで意味的に優勢になるためであるという。また、複合名詞句を構成する同格節の that も省略はできないが、これも同格節が意味的に優勢とならないためであるという

(13) We cannot deny the fact *(that) smoking leads to cancer.

このように that の生起には意味的な要因が関連していることが分かる。そこでここでは Bolinger や Erteschik の分析に従い、動詞補文に that が生起するのは、一つにはそれがないと意味解釈上不都合が生じる場合であると考えられる。

以上、英語の補文において that が生起する場合の要因を、文解析また意味解釈に帰すことができることを述べてきた。こうした適切な文解析又は意味解釈が履行されるのは、それを求める何らかの制約によるものと考え、その制約をここでは FULL-INTERPRETATION (FULL-INT) とする。

(14) FULL-INTERPRETATION (FULL-INT) : 文内のどの要素も適切な解釈を受けなければならない。

英語では *MOVE が HEAD よりも上位にランクされており、そのためゼロ that が生起することは既に述べた。一方、補文で that が生起するのは、この FULL-INT が *MOVE よりも上位にランクされているためであり、*MOVE に違反しても適切な文解析又は意味解釈を受ける必要があるため、that が導入されると考えられる。

以上、この節では幾つかの制約を提案し、その制約の相互作用と階層差により、英語の補文標識 that 及びゼロ that の生起に関して説明を与えてきた。次節では、that の生起に関する通時的変遷について考察していくことにする。

4 . 通時的変遷

現代英語では前述のアイスランド語とは異なり、常に補文に that が生起することはない。しかし、古英語や中英語においては事情が異なり、アイスランド語と同じ特徴が観察される。OED(CD-ROM)や Helsinki corpus を使い、現代英語において動詞補文にゼロ that を容認する動詞 (believe、think、know 等) の補文を変異形を含め検索して

調べてみると、若干の例外はあるが、古英語や中英語では、アイスランド語と同じく、それらの動詞補文に *that* が義務的と言えるほど導入されていることが分かった。(15)、(16)はそれぞれ14世紀、15世紀の動詞補文の具体例で、この頃まではまだ動詞補文には *that* が義務的に導入されている。

(15) 14th Century

To make us full beleve That he was verray Goddess sone.

(John Gower, *Confessio Amantis*, I, 273)

(16) 15th Century

the kyng thought that alle this was good...

(William Caxton, *The History of Reynard the Fox*, p.96, ll.8-9)

こうした補文標識の義務的音形化は、時制節のみならず不定詞節にも観察され、中英語では(17)のように *command* タイプの不定詞補文や ECM 補文に、補文標識の *that* が音形化されていたという事実がある。

(17) a. they declared the same to the kyng, who strayt wayes
commaunded that M' marces to be delyuerd owt of hand to m^r
Cromewell and so it was.

(George Cavendish, *Life and Death of Cardinal Wolsey*, 131.)

b. he never had knowleched that the tale to be trewe.

(*Paston Letters*, , 177, p.235)

ところが、(18)に挙げてあるように初期近代英語に入った頃、正確には16世紀の後半から、ゼロ *that* が動詞補文に頻繁に導入されるようになっている。

(18) 16th Century

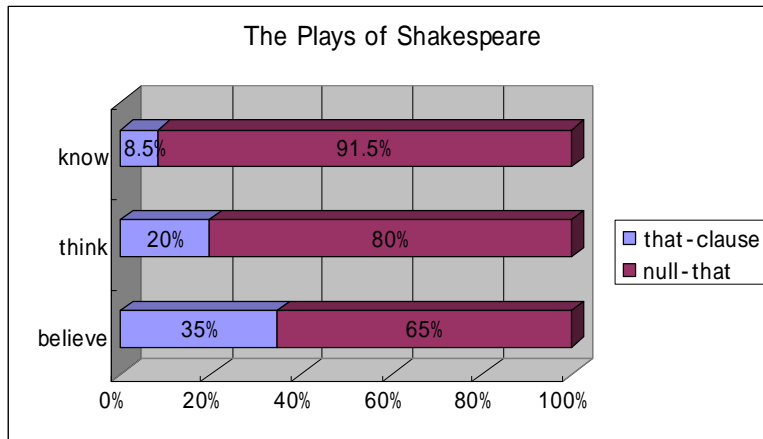
I beleuee we must leaue the killing out, when all is done.

(William Shakespeare, *A Midsummer Night's Dream*, iii. i. 15)

そこで、この時期のゼロ *that* の導入状況を知るために、シェイクスピアのすべての戯曲を対象に幾つかの動詞補文を調査してみた。その結果、動詞 *know* に関しては現在形、過去形を含め補文を従える例が188あり、その内 *that* が導入された補文は16、ゼロ *that* が導入された補文は172あった。動詞 *think* に関しては、現在形、過去形を含め補文を従える例が54あり、その内 *that* が導入された補文は11、ゼロ *that* が導入された補文は43あった。動詞 *believe* に関しては、現在形、過去形を含め補文を従える例が23あり、その内 *that* が導入された補文は8、ゼロ *that* が導入された補文は15あった。これらの結果を纏めた(19)

の表から分かるように、ゼロ that を導入した補文の方が多く、特に know の補文においては、ゼロ that の導入が圧倒的に多いという結果が導き出された。

(19)



前述のように、ゼロ that が導入される 16 世紀の後半までは、補文の CP の主要部に that が義務的に生じるが、that が義務的であるということは、この時期までの間接疑問文や関係代名詞節において、wh 句が CP の指定部に移動すると、wh 句と that の連鎖、所謂、二重詰め COMP を予測することになる(cf. Chomsky and Lasnik (1977))。実際、この二重詰め COMP は古英語より存在し、特に古英語では、(20)のように関係代名詞 + that という形で観察される。

(20) a. federe ðinum se ðe is in degolnise
 your father who that is in secret

(*The Gospel according to Saint Matthew* 6, 18)

b. butan tweon ðæt bið ure ðæt ðæt we lufigeað on oðrum monnum
 without doubt that is ours that that we liking on other men
 ‘doubtlessly that is ours which we love in others’

(*King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care*, 233, 12)

また、中英語になると(21)のような wh 句 + that の形が、特に 13 世紀末より頻繁に使用されるようになる(cf. Allen (1977))。Allen (1977)によると、こうした古英語より続く二重詰め COMP は 15 世紀の後半まで観察され、以後消滅しているとのことである。しかし、実際 OED(CD-ROM)や Helsinki corpus を検索すると、二重詰め COMP は 1

6世紀の後半までの文献に観察されている。⁴

(21) a. He which that hath the shortest shal biginne

He who that has the shortest must begin

(Geoffrey Chaucer, *Canterbury Tale*, 836)

b. Let no man wyt where that we war, For ferdnes of a fowlle
enfray.

let no man know where that we were for fear of a fell
affray

(*Towneley Myst.* 179, *OED*)

c. Whan that ye wylle, we shal alle goo with yow.

when that you will we shall all go with you

(William Caxton, *The History of Reynard the Fox*, p.55, ll.14-15)

また、興味深いことは、現代英語では that-痕跡という連鎖、所謂、that-痕跡効果は容認されないが、that が義務的に導入される古英語や中英語では、that-痕跡効果が認められるという事実がある。

(22) Thenne sayde the foxe who that saith that I am a traytour or a
morderar.

Then said the fox who that says that I am a traitor or a
murderer

(William Caxton, *The History of Reynard the Fox*, p.96, ll.8-9)

(22)は中英語の that-痕跡の具体例であるが、こうした that-痕跡の連鎖が消滅し、現代英語のように that-痕跡効果が生じるのは、これも二重詰め COMP が消滅した 16 世紀の後半と時期が同じである (Bergh and Seppänen (1992) 参照)。

最適性理論では制約は言語ごとに階層化されており、言語の通時的差異は制約群に部分的な再階層化が施されることによって生じると考えられている。そこで、英語では 16 世紀の後半までは FULL-INT >> HEAD >> *MOVE という階層を成していたのが、それ以後最小序列替えによる再階層化で、FULL-INT >> *MOVE >> HEAD となり、従って、補文にゼロ that が導入される一方で義務的に that を導入する現象、つまり、二重詰め COMP や that-痕跡という連鎖が消滅して行ったもの

⁴ シェイクスピアの戯曲においても二重詰め COMP は若干観察される。

(i) And where that you haue vow'd to studie (Lords)

(William Shakespeare, *Love's Labour's Lost*, iv. ii. 296)

と考えられる。⁵

(23) Late 16th Century

FULL-INT >> HEAD >> *MOVE FULL-INT >> *MOVE >> HEAD

二重詰め COMP や that-痕跡という連鎖は、現代英語でも方言差又は個人差があり、例えば、黒人英語では二重詰め COMP や that-痕跡という連鎖が認められ、また、アメリカのアーカンソー州では that-痕跡が容認されるという報告がある(Sobin (1987))。英語に限らず他のゲルマン系の言語についても同じことが当てはまる。ゲルマン系の言語の殆どが中英語と同じ特徴を示し、二重詰め COMP や that-痕跡という連鎖が認められている。次の(24)から(26)は、ゲルマン系の言語の that-痕跡と二重詰め COMP に関する幾つかの具体例であり、それぞれ a が that-痕跡、b が二重詰め COMP である。⁶

(24) Bavarian

a. Wer moanst du [t' daß [t d'Emma mog]]

Who think you that Emma loves

'Who do you think loves Emma?'

b. I woass ned wann dass da Xavea kummt.

I know not when that Xavea comes

'I don't know when Xavea is coming.'

Bayer (1984)

⁵ こうした制約の再階層化がなぜ生じたかについては、現段階では明確な説明ができない。Kemenade (1987, 1997), Roberts (1993), Kroch and Taylor (1997), Warner (1997), Ogawa (2001)によると、古英語期より続く V-to-I movement が 16 世紀にほぼ消失しているという。Ogawa(2001)はこの移動の消失がゼロ that の出現と無関係でないことを示唆しているが、これが正しいとすると、V-to-I movement の消失がここで提案する制約の再階層化を誘発したことになる。しかし、that を導入した補文とそうでない補文が、Bolinger (1972, 1979)、Bresnan (1972)、Erteschik(1973)が主張するようにそれぞれ異なった意味を持つとすると、V-to-I movement の生起にもそれが反映されることになるが、こうした主要部移動と that 補文の意味とがどのように関連するかは説明し難い。ここで述べる制約の再階層化の起因に関しては、さらなる議論が要求されるが、これについては今後の課題としておく。

⁶ 二重詰め COMP の例においては、CP-recursion に基づく分析とは異なり、that に相当する補文標識の左に生起している要素はその節の種類を指定していることから、CP の指定部に入っていると考えられる(cf. deHann and Weerman (1986), Platzack (1986), Bhatt and Yoon (1991), Authier (1992), Iatridou and Kroch (1992), McCloskey (1992), Vikner (1994, 1995), Rizzi and Roberts (1996), etc.).

(25) Dutch

- a. Wie zei je dat Hans gezien heeft?
who said you that Hans seen has
'Who did you say has seen Hans?'

Sobin (1987:37)

- b. Ik vraag me af of dat Ajax de volgende ronde halt.
I ask me PRT if that Ajax the next round reaches
'I wonder whether Ajax will make it to the next round.'

Bayer (2004:65)

(26) Icelandic

- a. Hver sagði hann, að væri kominn til Íslands?
who said he, that was come to Iceland
'Who did he say that had come to Iceland?'

Sobin (1987:39)

- b. Ég veit ekki hvort að þetta er í lagi.
I know not whether that this is all right
'I don't know whether this is all right.'

Vikner (1995:122)

調査結果を纏めた(27)の表から分かるように、スカンジナビアの言語は全て二重詰め COMP や that-痕跡を容認し、英語が属す西ゲルマン系の言語では、標準英語と高地ドイツ語以外はほぼ全て二重詰め COMP、that-痕跡を容認する。^{7, 8}

⁷ ゲルマン語には他に南アフリカで話される Afrikaans やスイスで話される Swiss German が含まれるが、データが収集できなかったためそれらは除外した。

⁸ 表(27)における、上記(24)-(26)に挙げた言語以外のゲルマン系言語の that-痕跡、二重詰め COMP に関する判断は Haider and Prinzhorn (1985), Hellan and Christensen (1986), Diesing (1990), Rizzi (1990), Vikner (1995), Haider et al. (1995)に挙げてある例又は記述に基づくものである。

(27)

Germanic Languages		doubly-filled COMP	<i>that</i> -trace	
Scandinavian	Icelandic	ok	ok	
	Norwegian	ok	ok	
	Swedish	ok	ok	
	Danish	ok	ok	
West Germanic	Frisian	ok	ok	
	Dutch	ok	ok	
	West Flemish	ok	ok	
	High German	*	*	
	Bavarian	ok	ok	
	Yiddish	ok	ok	
	English	OE	ok	ok
		ME	ok	ok
PE		*	*	

このように英語の方言やゲルマン系の言語の中には二重詰めCOMPや *that*-痕跡を容認するが、こうした言語間の差異や方言差が示唆するものは、その言語を話す話者の制約群が、それと同じ特徴を示す16世紀後半までの英語の制約階層であるということである。つまり、その言語を話す話者の制約群が FULL-INT >> HEAD >> *MOVE という階層を形成していることの帰結として説明される。

5 . 結語

以上、本稿では最適性理論における制約の階層性を仮定することにより、英語の補文標識 *that* の分布とその通時的変遷に統一的説明を与えてきた。現代英語において補文標識の *that* が生起可能な環境とそうでない環境は、階層化された(28a)の制約の相互作用の帰結として説明される。

(28) a. FULL-INT >> *MOVE >> HEAD

b. FULL-INT >> HEAD >> *MOVE

(28a)の制約群は最初からその階層であったわけではなく、16世紀の後半までは(28b)の階層を成していたが、最小序列替えによる再階層化で現在の階層になったと考えられる。その帰結として、16世紀の後

半まで観察された二重詰め COMP や that-痕跡といった現象が消滅したことが説明される。この(28b)の階層は、一部の英語の方言で保持されており、また英語以外にもその階層を持つ言語があるが、こうした言語では二重詰め COMP や that-痕跡が容認される。この事実も(28)の制約の階層差によって説明される。

英語では、(28b)から(28a)という通時的変遷を受けたと考えられるが、ドイツ語もそのような変遷を受けた可能性がある。中高地ドイツ語は16世紀以前の英語と同じ特徴を示し、現代ドイツ語(高地ドイツ語)にはない二重詰め COMP を容認している。

(29) Middle High German

Nu hær wa daz er mir lougent niht aller mîner leide
Now listen what that he me denies not all my pain
'Now listen how much of my pain he denies.'

Bayer (2004:61)

こうした事実も、ここで提案する制約の階層差によって説明が可能であると思われる。また、本稿では主にゲルマン系の言語を扱って来たが、その他の言語においても同じことが当てはまるかどうか考察することが今後の課題の一つである。

参考文献

- Allen, Cynthia (1977) *Topics in Diachronic English Syntax*, Doctoral Dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Authier, J.-Marc (1992) "Iterated CPs and Embedded Topicalization," *Linguistic Inquiry* 23, 329-336.
- Bayer, Josef (1984) "COMP in Bavarian Syntax," *The Linguistic Review* 3, 209-274.
- Bayer, Josef (2004) "Decomposing the Left Periphery, Dialectal and Cross-linguistic Evidence," *The Syntax and Semantics of the Left Periphery*, ed. by Horst Lohnstein and Susanne Trissler, 59-95, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Bergh, Gunnar and Aimo Seppänen (1992) "Subject Extraction in English: the Use of the *That*-complementizer," *English Historical Linguistics*, ed., by Francisco Fernández, Miguel Fuster, and Juan José Calvo, 131-143, Benjamins, Philadelphia.

- Bolinger, Dwight (1972) *That's That*, Mouton, The Hague.
- Bolinger, Dwight (1977) *Meaning and Form*, Longman, London and New York.
- Bošković, Željko (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation: An Economy Approach*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Bošković, Željko and Howard Lasnik (2003) "On the Distribution of Null Complementizers," *Linguistic Inquiry* 34, 527-546.
- Bhatt, Rakesh and James Yoon (1991) "On the Composition of Comp and Parameters of V2," *Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics* 10, 41-52.
- Bresnan, Joan (1972) *Theory of Complementation in English Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Chomsky, Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001a) "Derivation by Phase," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2001b) "Beyond Explanatory Adequacy," *MIT Occasional Papers in Linguistics* 20.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1977) "Filters and Control," *Linguistic Inquiry* 8, 425-504.
- deHann, Germen and Fred Weerman (1986) "Finiteness and Verb Fronting in Frisian," *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*, ed. by Hubert Haider and Martin Prinzhorn, 77-110, Foris, Dordrecht.
- Diesing, Molly (1990) "Verb Movement and the Subject Position in Yiddish," *Natural Language and Linguistic Theory* 8, 41-79.
- Doherty, Cathal (1997) "Clauses without Complementizers: Finite IP-complementation in English," *The Linguistic Review* 14, 179-220.
- Erteschik, Nomi (1973) *On the Nature of Island Constraints*, Doctoral dissertation, MIT.
- Grimshaw, Jane (1997) "Projection, Heads, and Optimality," *Linguistic Inquiry* 28, 373-422.
- Haegeman, Liliane (1991) *Introduction to Government and Binding Theory*, Basil Blackwell, Oxford.
- Haider, Hubert and Martin Prinzhorn, eds. (1985) *Verb Second Phenomena in Germanic Languages*, Foris, Dordrecht.

- Haider, Hubert, Susan Olsen, and Sten Vikner, eds. (1995) *Studies in Comparative German Syntax*, Kluwer, Dordrecht.
- Hellan, Lars and Kirsti Koch Christensen, eds. (1986) *Topics in Scandinavian Syntax*, Reidel Publishing Company, Dordrecht.
- Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard English: Dialect Variation and Parameter Setting*, Oxford University Press, Oxford.
- Iatridou, Sabine and Anthony Kroch (1992) "The Licensing CP-recursion and its Relevance to the Germanic Verb-Second Phenomenon," *Working Papers in Scandinavian Syntax* 50, 1-24.
- Kemenade, Ans van (1987) *Syntactic Case and Morphological Case in the History of English*, Foris, Dordrecht.
- Kemenade, Ans van (1997) "V2 and Embedded Topicalization in Old and Middle English," *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. by Ans van Kemenade and Nigel Vincent, 326-352, Cambridge University Press, Cambridge.
- Kroch, Anthony and Ann Taylor (1997) "Verb Movement in Old and Middle English: Dialect Variation and Language Contact," *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. by Ans van Kemenade and Nigel Vincent, 297-325, Cambridge University Press, Cambridge.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1984) "On the Nature of Proper Government," *Linguistic Inquiry* 15, 235-289.
- Lasnik, Howard and Mamoru Saito (1992) *Move α* , MIT Press, Cambridge, MA.
- McCloskey, James (1992) "Adjunction, Selection and Embedded Verb Second," Linguistic Research Report LRC-92-07, University of California, Santa Cruz.
- McCloskey, James (1996) "On the Scope of Verb-Movement in Irish," *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 47-104.
- Melvold, Janis (1991) "Factivity and Definiteness," *MIT Working Papers in Linguistics 15: More Papers on Wh-Movement*, ed. by Lisa Lai-Shen Cheng and Hamida Demirdash, 97-117, MIT.
- Munemasa, Yoshihiro (2003) *An Optimality Theoretic Approach to the C-system and its Cross-linguistic Variation*, Kyushu University Press.
- Ogawa, Yoshiki (2001) *A Unified Theory of Verbal and Nominal Projections*, Oxford University Press, Oxford.

- Pesetsky, David (1995) *Zero Syntax*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David and Esther Torrego (2001) "T-to-C Movement: Causes and Consequences," *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 355-426, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pesetsky, David and Esther Torrego (2004) "Tense, Case, and the Nature of Syntactic Categories," *The Syntax of Time*, ed. by Jacqueline Guéron and Jacqueline Lecarme, 495-537, MIT Press, Cambridge, MA.
- Platzack, Christer (1986) "COMP, INFL, and Germanic Word Order," *Topics in Scandinavian Syntax*, ed. by Lars Hellan and Kirsti Koch Christensen, 185-234, Reidel, Dordrecht.
- Prince, Alan and Paul Smolensky (1993) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*, RuCCS Technical Report 2, Rutgers University Center
- Radford, Andrew (1988) *Transformational Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Rizzi, Luigi (1990) *Relativized Minimality*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Rizzi, Luigi (1996) "Residual Verb Second and the *Wh*-criterion," *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*, ed. by Adriana Belletti and Luigi Rizzi, 63-90, Oxford University Press, Oxford.
- Rizzi, Luigi and Ian Roberts (1996) "Complex Inversion in French," *Parameters and Functional Heads: Essays in Comparative Syntax*, ed. by Adriana Belletti and Luigi Rizzi, 91-116, Oxford University Press, Oxford.
- Roberts, Ian (1993) *Verbs and Diachronic Syntax: A Comparative History of English and French*, Kluwer, Dordrecht.
- Shlonsky, Ur (1988) "Complementizer-cliticization in Hebrew and the Empty Category Principle," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 191-205.
- Sobin, Nicholas (1987) "The Variable Status of COMP-Trace Phenomena," *Natural Language and Linguistic Theory* 5, 33-60.
- Stowell, Timothy (1981) *Origins of Phrase Structure*, Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, MA.
- Tesar, Bruce (1998) "Error-Driven Learning in Optimality Theory via the Efficient Computation of Optimal Forms," *Is the Best Good Enough?:*

Optimality and Competition in Syntax, ed. by Pilar Barbosa, Danny Fox, Paul Hagstrom, Martha McGinnis, and David Pesetsky, 421-435, MIT Press, Cambridge, MA.

Vikner, Sten (1994) "Finite Verb Movement in Scandinavian Embedded Clauses," *Verb Movement*, ed. by David Lightfoot and Norbert Hornstein, 117-147, Cambridge University Press, Cambridge.

Vikner, Sten (1995) *Verb movement and Expletive Subjects in the Germanic Languages*, Oxford University Press, Oxford.

Warner, Anthony (1997) "The Structure of Parametric Change, and V-movement in the History of English," *Parameters of Morphosyntactic Change*, ed. by Ans van Kemenade and Nigel Vincent, 380-393, Cambridge University Press, Cambridge.

コーパス

Australian Corpus of English (ACE)

The British National Corpus (BNC)

The Lancaster-Oslo/Bergen Corpus (LOB)

The Helsinki Corpus of English Texts (Diachronic Part)

Old English Text

King Ælfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care, ed. by Henry Sweet, Periodicals Service Company, New York, 1988.

The Gospel according to Saint Matthew, ed. by Walter W. Skeat, Cambridge University Press, Cambridge, 1887 [(Reprinted) *The Gospel according to Saint Matthew and Saint Mark*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1970].

Ælfric's Catholic Homilies: the Second Series, ed. by Malcolm Godden, published for The Early English Text Society, Oxford University Press, London, 1979.

Middle English Text

Kentish Sermons, Selections from Early Middle English 1130-1250, Part I,

ed. by J. Hall, The Clarendon Press, Oxford, 1963.

The General Prologue to the Canterbury Tales, The Riverside Chaucer 3rd edition, ed. by Fred N. Robinson, Houghton Mifflin Company, Boston, 1987.

The History of Reynard the Fox, translated from the Dutch original by William Caxton, ed. by N.F. Blake, published for The Early English Text Society, Oxford University Press, London, 1970.

The Paston Letters, ed. by James Gairdner, Palgrave Macmillan, Hampshire, 1987.

The Life and Death of Cardinal Wolsey, ed. by Richard S. Sylvester, published for The Early English Text Society, Oxford University Press, London, 1959.

Early Modern English Text

Mr. William Shakespeares Comedies, Histories & Tragedies, A facsimile edition prepared by Helge Kokeritz with an Introduction by Charles Tyler Prouty, Yale University Press, New Haven, 1954.

Movement of Complementizer and its Cross-linguistic Variation

Yoshihiro Munemasa
(Fukuoka Institute of Technology)

This paper is concerned with cross-linguistic variation and diachronic change of (null-) complementizers in the embedded clauses, deriving the distributional properties from interaction among empirically well motivated constraints in Optimality Theory (OT) that we propose and their hierarchy. The constraints concern restriction on head, economy of derivation, and semantic interpretation. In line with OT, the constraints are stratified according to the descriptions of grammatical structures. The interactions of the pivotal constraints determine occurrence of (null-) complementizers. Furthermore, the constraint interactions and their different hierarchy can provide a unified account for the cross-linguistic variation concerning occurrence of complementizers and its diachronic change in the history of English.

(受理日 2007 年 2 月 26 日 最終原稿受理日 2007 年 6 月 21 日)